

- とよはしし  
○ 愛知県豊橋市（かき）  
すずきよしひろ すずきみゆき  
鈴木義弘（49歳）・鈴木美有紀（47歳）

鈴木氏が経営する『百年柿園ベル・ファーム』は、大正初期の曾祖父からかき栽培が始まったかき専作農園である。鈴木氏は大学院修了後、平成8年に就農後、放任園などを借用して面積を拡大し、現在の栽培面積は568.5aである。すべて露地栽培であり、労働力は、鈴木氏、美有紀氏、鈴木氏両親と臨時雇用6名である。令和2年の販売金額は農協出荷が60%、ネットなどによる青果直販が30%、加工品販売が10%となっている。

自園地の古木の「次郎」を早生品種「早秋」や晩生品種「陽豊」等に改植し、園地の若返りを図ると同時に、9月中旬から12月上旬までの収穫期間を平準化し、大規模かき専作経営を実現している。摘蕾・摘果作業と収穫作業の労働力確保のため、シルバー人材センターを利用しており、高齢者でも安全かつ効率的に作業が行えるよう、低樹高化や棚栽培の導入を図っている。さらに、規格外品を利用して「ドライ次郎柿」や「次郎柿チップス」を製造している。

平成9年に地域に先駆けて、40Lの不織布ポットでのポット栽培を開始し、通常栽培では3～4mに達するかきの樹高を2m程に抑制でき、収穫も通常栽培の半分程度の3年目から可能となった。現在は5aでポット栽培により移植用の大苗を育成し、移植当年から果実の収穫が可能となっている。また、「早秋」は頂芽優勢が強く高木になりやすい特性があることから、平成18年の導入当初にV棚仕立て、平成27年から垣根仕立てを産地で初めて導入し、低樹高化を図って作業効率化している。さらに、8月下旬に「次郎」で8000果袋かけを行うことで、霜や冷気から果実を保護し「次郎」の収穫時期の延長とロスの低減を図っている。また、地力向上や除草剤使用低減を目的に草生栽培を全園地で導入するとともに、剪定時に発生する枝の処理にはチップパーを活用し、粉碎した枝を柿園に還元している。